

若林奮の1990年前後の「移行」について

北谷 正雄

はじめに

彫刻家若林奮は、2003年に惜しまれながらも逝ってしまった。67歳だった。その早すぎる死は周囲の誰をも嘆かせたし、おそらくは本人が、その死期を感じて、いちばん当惑していただろう。この作家にはまだやり残したことがある。若林奮という彫刻家を見続けてきた人たちはみなそう思い、彼の制作活動が死によって永遠に中断され、二度と再開されることがなくなったことを惜しんだ。そして何よりも作家本人が、強くそのことを意識していたに違いない。「振動尺」という、彫刻についての独自の概念を創り出し、それに基づきつつ、ときにその概念を展開させ、あるいは集約、派生させながら、さまざまな作品を作り続けてきた若林であるが、作家としては当然ながら常に次の展開を見据え、その思索をさらに深めようと意識していたことであろう。実際、若林自身、その死の数ヶ月前に著した文章で、「『振動尺』は振動からつくった造語で、以後、私の彫刻の基本的な概念であるが、我々の仕事の場合、作品を制作しながら思考、感性を深めなければ概念とはなり得ない、まだ未熟なものである。」と記しており、自身の彫刻がまだ熟成の途上であると述べている¹。「もし」は禁句であるのを承知していても、それでも多くの人が、その死が若林の制作活動に終止符を打たなかったら、この作家は自身の彫刻をどのように展開させていっただろうかと思わずにはいられないだろう。

ところで、すぐ前で引用した若林の文章は、当時、開館を目指して建物の設計段階であった横須賀美術館に《Valleys》という作品の設置が決まり、その作業に取り掛かろうとする時期に書かれたものである。晩年、自分の亡き後の作品のことを気にかけていた若林は作品の整理を考え、《Valleys》については、展示されたときの寸法で高さ4m、幅14m、奥行29mというその大きさ（物量）から保管が困難であり、廃棄することまで考えていたようであるが、幸いにもその場を得て、作品は生き延びることになった。ただ、もともと屋内展示を想定して制作された作品を屋外に設置することになり、作品には別の要素も加わるであろうことも加味して、改めて《Valleys》について書き記したものである。この文章で若林は、「振動尺」、そしてその展開としての「所有・雰囲気・振動」という彼独自の考え方に触れ、それまでの自分の歩みをごく簡単にたどりながら、《Valleys》に至るまでをまとめている。若林にとって、「振動尺」や「所有・雰囲気・振動」に関係する一連の作品と《Valleys》との間には、何らかの区切りがあるようだ。

《Valleys》の制作年は1989年で²、確かにその時期以降の作品は、70年代後半の《振動尺》のシリーズや80年代の《所有・雰囲気・振動》の作品群とは趣が異なる。本稿では、若林奮の1990年代前後の彫刻作品について、「振動尺」や「所有・雰囲気・振動」という概念との関係を軸に、その展開を跡づけることを試みたい。

1. 二つの展覧会

1990年代以降の彫刻作品がそれ以前の作品と異なるといっても、一人の作家の歩みが歴史上の年代の区切りと符合するように切りがよく展開するなどということは、実際にはそうあり得ることではないだろう。《Valleys》にしても制作年は1989年で、その制作のためにはさらに以前から思考を積み重ねていただろう。そもそも、作家の歩みは途切れることなく続けられ、一つの仕事の完了が次の仕事の入口となるように展開されるものである。

1980年代の後半、若林は二つの大きな展覧会を経験している。1987年の東京国立近代美術館での「若林奮」展(京都国立近代美術館へ巡回)と翌88年の北九州市立美術館での「若林奮：1986.10-1988.2」展である。2年続けての美術館での個展で、しかも実際は東京での展覧会が87年の10月6日から始まり、北九州での会期は翌年の2月27日からとなっているので、二つの展覧会の間には5ヶ月弱の期間しかない。一人の作家がこのような短期間で美術館での個展を実現するのも驚嘆すべきことだが、改めて二つの展覧会のカタログを見てみると、それぞれの展覧会に出品された作品の相違にも、これが一人の作家の、わずか半年にも満たない期間での展開の様相かと思わせるものがある。おそらく当時の人々には、にわかには信じがたいものがあっただろう。

東京国立近代美術館での展覧会は、1973年に開催された神奈川県立近代美術館での「若林奮デッサン・彫刻」展以来、14年ぶりとなる美術館での大規模な展覧会であった。同展のカタログを見ても、出品された作品は1973年から1987年までの制作年となっていて、ちょうど73年の展覧会以降、87年までの若林の展開をたどるものとなっている。一方、北九州市立美術館に出品された作品は、展覧会のタイトルが示すとおり、1986年から88年の2年間に制作されたもので、展覧会としては新作展である。ここには、美術館側が企画する主旨とともに、二つの展覧会に対する作家の明確な意図が見られるだろう。

87年の「若林奮」展は、出品作品の制作年が示すとおり、同時期に展開された「振動尺」と「所有・雰田気・振動」という二つの大きな仕事に焦点をあて、その成果を示す内容となっている。文化庁芸術家在外研修生としてほぼ1年間にわたるパリ滞在中に制作された《立体ノート—気体、固体、液体、現在》(図1)から、帰国後に思索を深めるなかで到達した《振動尺》(図2)、そしてそれを展開させた《草の侵略及び持物について》(図3)や《森のはずれ》などの「所有・雰田気・振動」に関わる作品群まで、未発表であった作品やそれまで個々に画廊などで発表されてきた作品を一堂に会しての、その時点までの作家の歩みを振り返る、期間を区切った「回顧展」とも呼べるものとなっている。若林本人も、久々に美術館で自身の探究の成果を示す機会として、この展覧会には満を持して臨んだに違いない。

続く88年の北九州での展覧会に出品された作品は、直前の2年間に制作され、タ

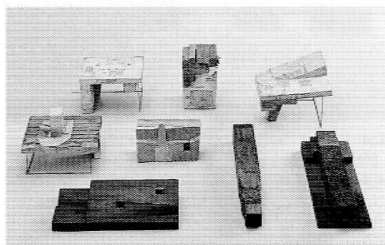


図1
《立体ノート—固体、液体、気体、現在Ⅰ～Ⅶ》
1973-74年 豊田市美術館蔵

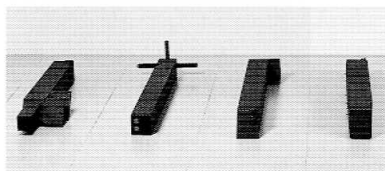


図2
《振動尺》(左からⅠ～Ⅳ)
1979年 川村記念美術館蔵

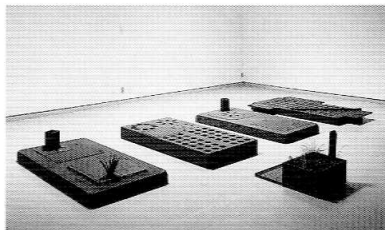


図3
《所有・雰田気・振動—草の侵略及び持物についてⅠ～Ⅴ》
1981-83年、1984年
Ⅰ：豊田市美術館蔵、Ⅱ～Ⅴ：豊田市美術館寄託

